

地域と協同の

2017年5月25日発行

153号

研究センターNEWS

巻頭言

愛知県都市農業振興計画-都市と農の共生発展に向けて-について

堤 英祐

都市農業を取り巻く社会情勢の変化を背景に平成27年4月に都市農業振興基本法が施行され、翌28年5月には都市農業基本計画が策定されました。この中で都市農地を「宅地化すべきもの」から「あるべきもの」と位置付け本格的な農業振興施策を講ずると大転換がなされ、愛知県でも平成28年の「食と緑の基本計画2020」そして、「都市農業振興計画」を策定することになり、愛知県都市農業振興計画が3月に策定されました。愛知県の人口は都市部へ集中し、県民の約8割が市街化区域に居住しています。都市部の農業者にとっては、消費者や事業者との距離が近いという立地条件を生かし、少量多品目の作付や直接販売、直接取引等により収益性の高い経営が展開できるという強みがあります。

これまで市街化区域内の農地は「宅地化すべきもの」として位置づけられ、税制でも宅地並課税、相続税等、農地の維持にとって不利な条件が多かったのです。愛知県では農産物の地元での消費の促進、産地直売所の取組み促進、農作業を体験することができる環境の整備、市民農園、体験農園等、都市農業者と都市住民との交流促進などを都市農業振興計画に盛り込み策定を進めていきました。生協はこうした分野では先進的事例があり、「コープあいち」で行っている交流事業の殆どが該当し、生産者が積極的に関わる条件が整備され、行政の支援の元で交流事業が広げられると期待できます。

めざす姿としては、Ⅰ都市農業の安定的な継続、消費者との交流・多様な担い手、Ⅱ農と緑に恵まれた都市環境の形成・土地利用計画、Ⅲ農のある豊かな暮らしの享受・共生関係・農に触れる、体験するなど農業者を応援し共生関係を築くこと、の3つです。めざす姿の実現に向けての施策体系は、都市と農の共生と発展をテーマに柱Ⅰとして都市農業の安定的継続、柱Ⅱ農と緑に恵まれた都市環境の形成、柱Ⅲ農のある豊かな暮らしの享受・の3つの柱としました。

今回のめざす姿は生協のビジョンとも重なります、これからの都市農業の安定的な継続のためには消費者が身近に存在するという優位性を生かし、多様な担い手が都市住民と交流しながら農業経営を維持発展させることが重要です。消費者も単に生産物を消費するだけでなく、農に触れる、作る、体験するなど農に積極的に関わり、農のある豊かな暮らしの享受をめざすことが大切になっています。

詳しくは愛知県のホームページ以下のURLで計画の詳細を確認できます。

愛知県都市農業振興計画 <http://www.pref.aichi.jp/soshiki/nogyo-shinko/tosinougyou.html>

堤 英祐（つつみ・えいすけ）・前生活協同組合コープあいち職員

愛知県都市農業振興計画策定検討会議構成委員（座長 向井清史 名古屋市立大学大学院経済学研究科特任教授）

CONTENTS

- 【巻頭言】「愛知県都市農業振興計画-都市と農の共生発展に向けて-について」・堤 英祐 1
- 【記事Ⅰ】「第四期研究奨励助成」応募の皆様の報告・中井 健一、大原 興太郎 2
- 【記事Ⅱ】ささえあい、おたがいさま、たすけあい（岐阜県から）・会員、事務局 3
- 情報クリップ 5
- 企画案内「2017年くらしと協同の研究」企画 8
- 書籍案内「協同の再発見 「小さな協同」の発展と協同組合の未来」

地域と協同の研究センター 5月の活動

- 5月11日(木)名市大寄付講義④
- 5月12日(金)三河地域懇談会・世話人会
- 5月15日(月)岐阜地域懇談会・世話人「ポポロの家」訪問
第64回・生協の（未来の）あり方研究会
- 5月17日(水)常任理事会
- 5月18日(木)名市大寄付講義⑤
- 5月22日(月)NEWS編集委員会
- 5月25日(木)名市大寄付講義⑥
- 5月27日(土)第17回通常総会、総会シンポジウム
- 5月29日(月)くらしを語りあう会

「第四期研究奨励助成」応募の皆様への報告

第四期研究奨励助成で 3 件の研究報告が届きました！ 文責：大島三津夫

2015 年度の募集した第四期研究奨励助成では、「これからの地域福祉」「地域における協同活動」をテーマに、4 件の応募があり、内 3 件の報告が届きました。今日はその 3 件の報告の概要について応募の皆様から紹介をいただきました。詳しくは第四期研究奨励助成の応募者の皆様の報告会を開催し、別途報告集も発行する予定ですので、ぜひご参加・ご利用ください。

山村における棚田の保全を**地域の共同の力でいかに進めるか**

中井 健一

棚田問題の所在

我々の先祖がかって山を切り開き、石垣を積み、もしくは土手を築き、遠方から水路を引き、水稻稲作を続けてきた棚田が岐阜の各地にある。行ってみると石垣の段々が山の頂上に積みあがるようにのび、小さな水田が水をたたえている景観はどこもみごとであった。

ところが今、この棚田が崩壊の危機に直面している。調査した棚田のほとんどで「百姓できても後 3 年からせいぜい 4・5 年」と言う人が多い。すでに耕作放棄がすすみ（多いところは農地の 20% ぐらい）そこは、灌木が生い茂り、石垣がくずれて崩壊がはじまっているところもあった。そこで棚田の保全は個別農家にまかせきりでいいのか、棚田が自然遺産、産業遺産、歴史遺産であるかぎり地域の共同の力で維持していけないだろうか、このような問題意識から棚田を訪れ、地元の人に話を聞き、棚田のこれからを考えることにした。

調査の概要（要旨）

岐阜県には「ぎふの棚田 21 選」として県が 19 地区 21 の棚田を認定している。今回その中の 4 箇所と県外ではあるが保全のモデルとしてよく知られた白米千枚田（通称輪島の棚田）を現地調査した。

調査地点

1. 貝原棚田 揖斐川町春日美東
2. 小川棚田 下呂市小川
3. 滝町棚田 高山市滝町
4. 坂折棚田 恵那市中野方町坂折
5. 白米千枚田 石川県輪島市白米町

それぞれの棚田は個別の事情と特色があるが、字数の制約があるので省略し、くわしくは研究所宛に提出している報告書全文をごらんいただきたい。したがって、ここではテーマに沿った全体に共通するだろう棚田保全の方向性をのべることにする。

まず、きちんと維持、保全されている棚田には情熱をもってとりくんでいるキymanがいた。キyman

は周辺にたくさんの協力者を組織しているか、ひとりではむしやにがんばっているのか、その活動スタイルによって多分将来が決定されるであろう存在である。活動スタイルによって「地域の力」にも格差が生じている。次に全体に公の役割がきわめて弱体である。これが白米千枚田との大きなちがいであった。しかし一箇所だけだが第三セクター組織が活動しているところがあった。第三に、保全に成功している白米千枚田にモデルをみるのだが、自作農家、企業、地方自治体（例えばⅢセク）、棚田オーナー、ボランティアなど多様な主体が連携して棚田を保全する地域力ミックスが重要だとわかった。県下調査地の一箇所では企業が社員教育に棚田の耕作を行っていたけれども、これなどは地域力ミックスの萌芽といえよう。キymanの活動の方向がみえたように思う。第四は棚田結婚式、カカシコンクール、あぜ道のイルミネーションをはじめ実に多彩なイベントによって棚田が維持されていた。地域の大多数の人々は無関心か、効率の悪い狭い農地で年取ってから百姓はやりたくないと思っている。しかし人々が入りこむことによって地域の人々に影響を与える。人の交流が閉鎖的だった地域の意識を変える可能性があると思った。



恵那市 坂折棚田

竹林整備・竹炭焼きを通じた**協同活動の意義と可能性****—特定非営利活動法人三重スローライフ協会の竹プロジェクトを通して—**

大原 興太郎

松阪農業公園ベルファームにおける竹林整備や竹炭焼きという三重スローライフ協会の NPO 的な取り組みの中で、仲間づくり、協同性がどのように進むのか、を参与的観察方法によって研究した。

2015 年から初め、2016 年の 1 月より多くのボランティアの人々の協力により実施されたベルファーム

ム竹林整備は参加者 40 名、述べ 200 人日以上 の協力で 2016 年 5 月に一旦完了した。以後、整備した竹林の保全、定期的(月に一回)な竹炭焼き、竹材や竹炭を使った子どもたちとの〈竹を知り、竹と遊ぼう〉イベントを行った。全くの無償ボランティア活動で交通費はもちろん道具その他も持ち込みの活動が 2016 年一年間で 48 回も続いたことは、協同意識・仲間意識の高まりを表すに十分な証拠と考えられる。年齢層は 60-70 歳代が一番多く、40-50 歳代は少数であった。

定年世代はまだ元気な人達で、これだけ多くの人が複数回ボランティア活動に参加できるのは、いくつかの要因が複合的に関係していると思われる。「人と繋がれる喜び」、「仲間意識」、アドラーのいう「社会貢献(他者貢献感)」、「ちょっとした楽しみやインセンティブ」(理事長が簡単な昼食を提供したり、時には会費を払って炭火で造った豚汁やおにぎりでワイワイガヤガヤと話すのが楽しい)などが考えられる。イベントに来てくれた子どもはメンバーの孫世代、その親は子世代である。竹切りや小刀の使い方も初めての人が多く、やってみた価値はあったと思われるが、自然に親しむ技能や知識をつけるとなると、年間を通した継続性が求められる。

ボランティア的な仲間づくりがそれなりに功を奏したのは、一人ひとりが持っている上記の活動要因をうまく引き出せた、世話役(コーディネーター)の存在があったことである。

これまでの私自身の経験から考察すると、そのような媒介者になりうる人は、①基本的に人が好きである、②必要と思ったことに労をいとわない傾向がある、③好奇心が強い、④考えているだけでなく、行動する(ここで行動には今ならメールや電話をすることも含まれる)、⑤こまめである、などの要素を強く持っている人である。世の中の格差が広がり、さまざまな意味で不安や不確実性が増してきている時代だからこそ、協同活動の基本である仲間づくりを広げていくことの希望(E. フロムは希望は孕まれたものに気づくことであると述べている)を持ち続けることが大事だと改めて気づかされる。

外国人住民を孤立させない地域を目指して

ケースワーク研究を通して

外国人ヘルプライン東海 後藤 美樹

外国にルーツをもつ方々の様々な相談に対応するなかで、当団体に関わる人たちと議論し、政策提言につなげる調査を実施したいと思ったのが応募のきっかけです。

本調査研究では、1) 困り事を抱えた外国人住民が、どんな社会資源(制度、施策、支援機関など)に繋がる事が出来た／出来なかったか、2) 既存の制度にはどんな点が不足していたのか、3) 困りごとの解決にあたって、当団体や他団体、個人の支援者がどのようにしてその欠陥を埋めたのか、という調査課題を設定しました

とくに力を入れたのは、研究会の実施です。研究会では、当団体が支援した事例を取りあげ、それぞれの分野の専門家を招いて上記の調査課題について話し合いました。

第 1 回目の研究会では、日本人夫から身体的・精神的暴力を受けている、東南アジア出身女性について話し合い、第 2 回では、20 代の統合失調症の娘をもつ南米出身女性からの相談を取り上げました。第 3 回目は、中国人出身のてんかん発作のある小学生の支援について話し合いました。それぞれ、当団体の相談員・通訳者を含め、10 名程度が参加し、様々な意見が出されました。

第 1 回の研究会では、参加者の一人である、行政機関の相談員が「定期的に連絡して、いつも相談者の側にいることを知らせるのが大事」というコメントをして下さいました。外国人の支援について議論される時、とかく入国管理法など独自の制度に関する知識や、文化の異なる人とのコミュニケーション方法など、独自のスキルが強調されがちになりますが、このコメントを通じて相談者に寄り添う事が大事なことに改めて気付かされました。第 2 回目の研究会では、20 年以上外国人女性を支援している方の話から、メンタルの課題を抱えた外国人住民の存在が以前より顕在化しつつあり、相談機関に繋がりが弱くなっている現状を知りました。そして、全ての事例において、相談時の通訳をどうするか、どのように多言語で制度を紹介するかなど、「言葉の問題」が重要な課題として指摘されました。また行政サービスについて、たくさんのアイデアが出されましたが、今後の具体的な政策提言に繋げるためには、さらに議論を深める必要があります。

本研究を実施したことにより、当団体の取り組みへのヒントや、きっかけとなる知見をたくさん得ることができました。最後の研究会で取り上げた障がい児支援は、第 1 回、2 回目で取り上げた分野と比べて、外国人への取り組みが少ない分野なのですが、研究会での議論を参考に、今年度外国人の子育て支援事業を実施することとなりました。この場を借りて、改めて地域と協同の研究センターのみなさんにお礼を申し上げる次第です。

(おおしま・みつお)

「まち」の「ささえあい」-つながりを広く、太く、いつまでも...【岐阜県】

岐阜県でこの4月、「まち」の「ささえあい」をつなぐ活動をすすめる皆さんの総会が3カ所で開かれた。これまでの実践、やり甲斐と喜びを分けあい、未来に向かって「まち」に暮らす人々が気持ちをひとつにする場だった。

地域と協同の研究センターから会員、事務局が総会に参加させていただき、その推進力と工夫を分けてもらいました。読者のみなさまもぜひ共有ください。

「ハートをつなぐ集い〜第4回おたがいさま東部総会〜」は4月15日、コープぎふ多治見支所（多治見市）で開催された。活動報告では、4年間に及ぶ「父子家庭」への応援で家族同様に子どもの成長を見守れこと、家の掃除に入り部屋がきれいになっていくにしたがって「死にたい」と言っていた利用者が

「やりたいことがいっぱいある！」に変わったこと、利用者の困りごと解消が応援者の「役に立てた、自分が成長した」という喜びにもつながったこと等、これこそ「おたがいさまの神髄」ではないかという、貴重な報告ばかり。来賓の地域包括支援センターの方からは「介護保険の狭間のようなことをお願いしていたが、かゆい所に手が届く応援によって、ここまで広がったのだと思います。」との言葉。五ヵ年計画の利用時間目標5,000時間を2年早く達成。利用者の口コミ、行政や地域諸団体との連携、コープぎふ職員からの声かけもあつて着実に「おたがいさま」の輪が広がっていた。懇親会では、手作りのおもてなしと地元メーカー（美濃酪連、内堀醸造、サラダコスモ）の試食、ミニコンサートで盛り上がった。

閉会挨拶を紹介したい。「私には野望があります。今『おたがいさま東部』は生協の関係者だから安心と言われていますが、おたがいさまの活動が活発になり、いつか、生協は『おたがいさま東部の関係者』だから安心ね！と言われるようになりたい。」とのこと。野望の実現はそう遠くはなさそうだ。【事務局：井貝順子（いかい・じゅんこ）】

『おたがいさまひだ』第9回総会「ねこの手集会」（写真下）は4月27日、高山市総合福祉センターにて開催。「楽しく子育てができ、年をとっても安心して暮らせる地域のお手伝い」を理念に、地域に根付いた活動を展開していた。高山市役所から福祉部長をはじめ、協働推進課、子育て支援課、社会福祉協議会からは児童課、地域福祉課、福祉サービス総合相談支援センター等、さまざまな部局からの参加があり、根付きが形として確かめられた。応援の事例では、病気の方の夕食の準備・夜のベッドへの移動、ネコの世話、雪かき、お葬式への付き添い、2人目を出産するお母さんの子育てのお手伝いなど様々。市役所の手続きもし、いろいろな事例を重ねて、窓口の方にも『おたがいさまひだ』のことが広まった。2016年度は継続利用が減ったことや他団体に

つなぐケースも増えたことで、応援時間は前年度より減少。しかし、行政や介護事業所の中で『おたがいさまひだ』の認知が拡がり、問い合わせも増えた。活動・つながりはより濃く、よりこまやかに進化中。発足時からの伝統、美味しい手作りの昼食を囲んでの交流は変わらず、みなさんの笑顔があふれる総会だった。【事務局：伊藤小友美（いとう・こゆみ）】

第24回コープぎふ・くらしたすけあいの会総会「虹のつどい」

（写真右）は4月28日、長良川スポーツプラザ2階（岐阜市）で開催。岐阜市社会福祉協議会、ボランティア・市民活動支援センター、NPO法人・ぎふ市民協、コープみえとコープあいち「くらしたすけあいの会」、おたがいさまひだ、おたがいさま東部、コープぎふ理事会、活動会員など50名の参加。「地域になくてはならない活動として連携を強めたい」「成年後見人制度の学習会を一緒に広げよう」「東海三県で岐阜県にも仲間

がいて頼もしい」等の挨拶があり、コープぎふ・上林（かんばやし）副理事長がこの24年をふりかえり「およそ四半世紀、あなたのくらしに役立ちますという理念が着実に広がっている」と評された。昼食休憩時にはおなじみの授産所の販売、そして「いぶき作業所」から福祉基金助成で購入した「耕運機」の紹介と謝意が示され6月の田植えへのおさそいも。午後には広瀬淳子さん（活動会員、ひろせ・じゅんこ）を講師に「音楽療法」として、みんなで声をだし動いて、全員が賑やかに交流。男性会員による飛び入りの「発声法」紹介もあり、あっという間に時間が立った。【会員：伊藤佐記子（いとう・さきこ）】

編集：事務局・渡辺 勝弘（わたなべ・かつひろ）■



情報 クリップ



メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 半 定価/ページ
▶組合員の想いに応える生協の葬祭事業・「終活」支援 NAVI 2017. 5 No. 782 日本生活協同組合連合会	特集 組合員の想いに応える生協の葬祭事業・「終活」支援 <コープのある風景> とちぎコープ <こんにちは！生協男子ですっ！> ならコープ 山下直也さん <地域に愛される店づくり・人づくり> コープこうべ コープ西神南 <今月のコープで笑顔がキラリ> コープやまぐち <エッセイ わな猟師の春夏秋冬> 千松信也 <宅配・現場レポート> 第2回全国生協営業コンテスト <生協大好きママ コプ山さんの 教えて！CO・OP 商品> CO・OP べんりな合わせ酢 <日本全国ふだんのくらしを支えたい> みやぎ生協 <想いをかたちにコープ商品> CO・OP ベビーチーズ <熊本地震復興支援情報> 熊本県生協連 <明日のくらし ささえあう CO・OP 共済> コープしが <この人に聴きたい> 元プロテニスプレーヤー 杉山 愛さん <ほっとnavi> いばらきコープ コープふくしま <コミュニケーション広場>	2017 年 5 月 A4 版 36 頁 360 円
▶20年後、子どもたちの貧困問題 社会運動 2017. 4 No. 426 市民セクター政策機構	特集 20 年後、子どもたちの貧困問題 格差社会を終わらせよう！ 今から 10 年前 FOR READERS 貧困は自己責任」と放置すれば日本は危機的状況になる I 女性、若者たちの「現在」 すべての少女に「衣食住」と「関係性」を！ 少女から搾取しない社会へ 女子高生サポートセンター Colabo 代表 仁藤 夢乃 なぜ、女性は貧困なのかー3人の事例から考える ノンフィクションライター 飯島 裕子 企業は激変し若者は貧困を強いられた NPO法人ほっとプラス代表理事 藤田 孝典 II 子どもたちのための「未来の創り方」 福祉の限界を超える 町民すべてが生涯現役 藤里町社会福祉協議会会長 菊池 まゆみ 生きづらさを抱える若者を地域で支援する NPO法人リロード、ワーカーズ・コレクティブはっぴいさん 編集部 貧困対策に必要なのは連帯への意識転換 首都大学東京教授 阿部 彩 社会の分断を消す選択肢をつくる 慶応義塾大学教授 井出 英策 オランダの子どもはなぜ「幸せ」なのか 教育・社会研究家 リヒテルズ直子 悼みの列島 日本を語り伝える 第3回 信州に遡る満州に渡った人びとの思い ライター 室田 元美 おしどりマコの知りたがりの日々・レッツ想定外！ 第6回 ドイツの脱原発の動きは次のステージへ 芸人・記者 おしどりマコ	2017 年 4 月 A5 版 158 頁 定価1000 円 (税別)

メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 巻 定価/税別
▶JA自己改革の現場から ~~~~~ 月刊 J A 2017. 5 vol. 747 全国農業協同組合中央会	スゴイ農業、スゴイ J A J A 自己改革の現場から ① 組合員に対応する自己改革と発信力の強化に向けて — J A ぎふの取り組み 小林 元 ② 農業を「憧れの職業」に — (株) 南国スタイル (高知県) の取り組み J A 全中広報部 農政トピック 加工商品の原料原産地表示の新制度を考える 国内で製造又は加工された全ての加工食品について 原料原産地が食品表示義務の対象に 消費者庁食品表示企画課 きずな春秋—協同のこころ— 童門 冬二 私のオピニオン 壇 蜜 J A トップインタビュー 共販率高め、野菜ブランド化へ 佐々木 福栄 (青森県 J A 八戸・代表理事組合長) 協同組合の広場 (日本生協連、J F 全漁連、全森連、全国中央会) 展望 J A の進むべき道 信用事業の代理店化を考える 太田 実 (J A 全中常務理事) 海外だより [D. C. 通信] 連載 72 酪農王国アメリカ 中村 岳志 第 30 回 広報活動優良 J A 紹介 総合の部 大賞 J A ぎふ (岐阜県) トピック 「がんばろう！日本の畜産・酪農」応援キャンペーンに多数の応募！ J A 全中農業対策部畜産園芸対策課	2017 年 5 月 A4 版 48 頁 年間予約 5,109 円 (送料・ 消費税込)
▶プライベート ブランド (P B) 戦略 を考える ~~~~~ 生活協同組合研究 2017. 5 Vol. 496 公益財団法人 生協総合研究所	■巻頭言 旗を掲げる 本田 英 — ▶特集 プライベートブランド (P B) 戦略を考える 大手チェーンの P B 戦略の動向とこれからの方向性 —プレミアム化する P B 市場— 中村 博 C O ・ O P 商品のブランド刷新の到達点と今後の課題 藤井 喜継 日本におけるプライベート・ブランド小史 鈴木 岳 P B 商品に対するナショナル・ブランド・メーカーの対応戦略 浦上 拓也 欧米大手小売業の P B 戦略 神谷 渉 欧州生協の P B 商品 佐藤 孝一 ■時々再録 映画「わたしは、ダニエル・ブレイク」が描くイギリス社会 白水 忠隆 ■本誌特集を読んで (2017・2、2017・3) 中島 達弥 ・ 関矢 充人 ■新刊紹介 おぐらなおみ／読売新聞生活部『母娘問題 オトナの親子』 山梨 杏菜 ■研究所日誌 ●公開研究会 「福祉・医療における生協の存在と意義」(東京・中野 5/15) ●公開研究会 「組合員参加と購買活動の相互関係を解明する」(兵庫・神戸 5/30)	2017 年 5 月 72 頁 B5 版

メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 半 定期
▶震災とこころのケア ~~~~~ 文化連情報 2017. 5 No. 470 日本文化厚生農業協同組合 連合会	農協組合長 インタビュー（38） 一農業者という原点を忘れたくない 小泉 勉 共通の利益に基づく自発的な結合体 木内 健行 院長リレーインタビュー（296） 職員全体が楽しくやりがいを持てるように 森 拓也 震災とこころのケア 長 純一 現代社会と協同組合（2）協同組合解体政策の背景と特徴 北出 俊昭 アメリカの医療制度（8） 共和党の医療制度改革法案とその顛末 高山 一夫 韓国農業の実相 ー日本との比較を通じて（9）大規模稲作農家の実態 品川 優 臨床倫理メディエーション（12） 選択と自己の意思決定との間の不一致 中西 淑美 知多厚生病院栄養科の取り組み（下） 喫食率向上を目指して 伊藤 美香利 全国厚生連統一献立 新潟＝タレかつ井 阿部 和恵 住み慣れた地域でいつまでも暮らし続けるために 小磯 明 デンマーク&世界の地域居住（96） オランダの革新 15：地域に密着した保険会社 松岡 洋子 熱帯の自然誌（14）イスラム教 安間 繁樹 イースト・ロンドンにおけるコミュニティ開発と 移民女性の自立支援に関するワークショップ 熊谷 麻紀 イギリスの社会的企業 社会的家主：G e n t o o（2）直面する課題 小磯 明 ●野の風● 地域の高齢者の元気のために／國澤 美樹代 ◆第 13 回厚生連医療機器・保守問題対策会議 開催のお知らせ ◆平成 29 年度厚生連院内感染予防対策研修会 開催のお知らせ＜基礎・中級＞ □書籍紹介 社会保障制度改革が目指しているもの／小磯 明 2016 世界の社会福祉年鑑／小磯 明 □演劇紹介 劇団銅鑼 彼の町／熊谷 麻紀 ▶線路は続く（110） 空への玄関口京急空港線／西出 健史 ▶最近見た映画 はじまりへの旅／菅原 育子	2017 年 5 月 B5 版 88 頁 文化連情報 編集部 03-3370-2529 *注

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(♣)などを中心に順不同で紹介しています（主な内容は目次等から事務局が要約しています）。詳細は研究センター事務局までお気軽にお問い合わせください。

企画案内

2017年くらしと協同の研究所
第25回 総会記念シンポジウムのご案内

生協労働のあり方が、いま注目されている。その背景のひとつには、生協の現場における深刻な人手不足の問題がある。「正規職員・パート職員」のみならず、アルバイト、嘱託、限定職、ワーカーズ、有償ボランティア、派遣、委託等々さまざまな雇用・労働形態を採用し、「個配」を主力業態として成長してきた生協であるが、いまや留学生や外国人研修生の採用も視野に入れる生協が出てきた。本シンポは 協同組合の実践家と研究者が「新たな生協労働像」を描くために企画された。

期 日 6月24日（土） 13:00から シンポジウムと総会

6月25日（日） 9:30～12:30 分科会

会 場 同志社大学・今出川キャンパス 良心館 *申込み締切 6月12日

24日解題 「生協における職員・労働者—歴史と現状、研究会の課題」

講師：杉本貴志（関西大学教授）

三つの事例報告と研究者コメントおよびパネルディスカッション

25日分科会 第1分科会 「今、考える「協同組合」の価値～若手の目に映る「協同」から」

第2分科会 「協同組合による地域づくりへの道—産直・地産地消から福祉まで—」

第3分科会 「生協職員の働き方を考える—医療福祉生協職員調査から何がみえたか—」

主催：くらしと協同の研究所 〒604-0857 京都市中京区烏丸通二条上る蔦絵屋町258コープ御所南ビル4F

TEL：075-256-3335 FAX:075-211-5037 E-mail:kki@ma1.seikyoku.ne.jp（1は数字）

【担当：熊崎辰広】

書籍案内



協同の再発見 「小さな協同」の発展と協同組合の未来

著者：田中 秀樹（編） 出版社：家の光協会

定価：1,944円（税込） 判型：B6 207ページ

内容：経済のグローバル市場化により農村や地域が疲弊していく一方で「小さな協同」と呼ばれる住民主体の活動が注目されている。各地の事例と成果を検証することで見えてくる、新たな協同組合運動の可能性とは。

目次

序章 「小さな協同」とは何か

「おたがいさま」はどのようにして生まれたのか ほか

第1章 小さな協同としての集落営農の実践と農協

第2章 農協における助け合い協同の発展と福祉事業の構造

第3章 「おたがいさま」の活動から見えてくること

第4章 ワーカーズ・コレクティブでつくる「福祉専門生協」

第5章 農協における小さな協同の発展と農協の展望

家の光協会ホームページより

【担当：大島 三津夫】

2017年5月25日発行（毎月25日発行）

定価200円

（税・送料込み。年会費には購読料が含まれています）

発行 特定非営利活動法人地域と協同の研究センター

代表理事 西川 幸城

〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39

TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail AEL03416@nifty.com

HP http://www.tiiki-kyodo.net/

地域と協同の研究センター 6月の活動予定

6月1日（木）名市大寄付講義⑦

6月6日（火）2017国際協同組合デー企画相談会

6月8日（木）名市大寄付講義⑧

6月15日（木）名市大寄付講義⑨

6月19日（月）尾張地域懇談会・世話人会

6月21日（水）三河地域懇談会・世話人会

6月22日（木）名市大寄付講義⑩

6月23日（金）研究フォーラム食と農、地域福祉・世話人会

6月29日（木）名市大寄付講義⑪

6月30日（金）協同の未来塾①